

今回は、私が2年間滞在した大連市である。その歴史や私が勤務していた会社(大連日通集装箱制造有限公司)のこと、また中国人の習慣など旅行ガイドブックに書かれていないようなことを書いていこうと思う。

さて、大連市だが、日本でも大連でも「私は大連で生まれました」とか「祖父は満鉄に勤めていました」など大連にかかわりのある人が思っていた以上に多いのに驚いた。日露戦争の勝利とその後の満州への移住者の多さ、又、近年大連進出の日本企業も多いことなどから日本人の多くは大連に特別な親しみを持っているように感じた。

大連市は行政的に見ると行政区はかなり広い。そして市の下に普蘭店市(プーランドィエン市)とか瓦房店市(ワーファンディエン市)などの市があり、日本の行政割の感覚からすると少し奇異に思える。人口は約600万人と横浜市や大阪市より多いが、いわゆる旧市街というか、狭いくくりの大連市は250万人前後といわれている。それでも多いと思うがなにしろ13億人の国であるから1ヶタ違うようだ。ちなみに遼寧省の省都である瀋陽市(シェンヤン市)は約800万人くらいである。従って人通りはどこに行っても多くレストランの多くはどの時間帯に行っても、人、人、人で慣れないうちは疲れてくる。日本のようなさびれた「シャッター通り」などはない。

歴史を見ると、1899年に帝政ロシアが大連港や旅順港の建設を始めたところから始まる。つまり歴史に名を残す大連は、たかだか111年の歴史しかないわけである。ロシアは1898年に当時の清(満族の建てた国。テレビ化された「蒼穹の昴」に詳しい)から遼東半島を租借し、旅順を軍港として拡充しはじめたが、商業港としては狭く、そのため大連の都市建設を本格化させた。そして大連はロシア語で「遠方」を意味する「ダーリニー」或いは「ダルニー」と呼ばれた。それ以前は漁村であり、又この地方は土地に上質な青泥を含んでいることから「青泥窪」(チンニーワー)と呼ばれていた。日露戦争(1904～05)で日本が勝利し、占領したあと、1905年に「大連」という名前がつけられたのである。それから1945年の敗戦まで40年間この地を支配した。そして町名から通り、広場、橋などに日本名をつけていった。

大連発展の中核は、1906年設立された南満州鉄道株式会社(満鉄)である。初代総裁は、あの「後藤新平」である。大連駅から歩いて10分くらいのところに有名な中山広場(昔は「大広場」と呼んだ)がある。中国国内を旅行すると丸いロータリー状の広場があちこちにあるが、ここもロー



旅順駅 満鉄時代に建設されたまま残されており、今でも使用されています

タリーとなっている。その周囲に旧横浜正金銀行や満鉄の直営だったヤマトホテルなど当時の建物がそのまま残ってそれぞれ使われている。タイムスリップしたようで風情のある広場である。夜ともなればライトアップされとてもきれいで夢の中にいるようである。中山広場から歩いて数分のところに旧満鉄本社がある。築約100年であるが、この建物もちゃんと「大連鉄道有限公司」が使用している。ヤマトホテルも今は「大連賓館」と衣替えし、3つ星ホテルだが、当時をなつかしむ日本人の旅行者の中には、わざわざこのホテルに宿泊する人もいるという。

ホテルについて少しふれると、大連市の中心部はシャングリラホテルやスイスホテルなど5つ星ホテルが8ヶ所あったと思うが今は少しふえているかも知れない。市内の中心部から30数km離れた所に経済開発区があり、日本からのメーカーを中心に約350社進出しているが、この地区は4つ星ホテルが最高であった。しかし設備の改善を行い、2009年春に「銀帆ホテル」が5つ星に昇格した。この経済開発区に私の勤めた大連日通があり1991年に進出した。進出した当時は日本企業も少ししかなく当時の写真を見ると周囲は空き地ばかりでインフラも不十分であり、ホテルもまともなホテルはこの銀帆ホテルくらいだったと言う。当時この現地法人を設立する時の担当者は皆このホテルに泊まりながら仕事に励んだとのことである。彼らは冬は零下15°～20°くらいの中で働き、休日は飲み屋もほとんどないためホテルのレストランで飲むしかなかったようだ。今は高層ビルが林立し、当時はなかった電車も走り、日本料理屋も数えきれないくらいあちこちらにある。

2007年7月に赴任した時、前の総経理がシャングリラホテルの住宅棟の21階にいたため私はその部屋を引き

継いだ。引き継いだ時、その部屋の広さに驚いた。5つ星だから設備や雰囲気もよい。しかし家賃もその分高い。私は単身赴任であったのでもったいないと感じ1年後ラマダホテルと言う4つ星のホテルに引越した。このホテルは大連駅のすぐそばで便利なおところにある。

このあたりで大連日通について書いていきたい。会社の名前を見ただけでは何の会社か分かる人は少ないだろう。集装箱とはコンテナの中国語である。製造の制は、「製」の中国の正式な漢字である。つまり日本通運の使用する海上コンテナを造るメーカーである。当時は材料の鉄板の品質が中国製品はあまりよくなかったため、韓国あたりから輸入して製造し日本に送ったそうだが、今は品質も向上し、全量中国企業から仕入れている。コンテナを造り始めたが、コンテナの空箱だけ日本に送るのは非効率ということからロールボックスも造りコンテナの中に入れて輸出するようになった。

会社は、8時から始まるが5分前から全員構内で体操をやることからスタートする。この体操は日通体操(日通グループには独自の体操がある)ではなく、中国で一般にされている体操のようだ。工場の敷地は5千坪で50年間の賃借契約である。中国全土は基本的に法人、個人を問わず所有権は認められない。国の所有なのであるから建物が建つていようと必要ならすぐ立ち退かせて道路や鉄道を造ったりする。日本では都市計画を策定したあと20年も30年たっても実現しない道路がいくつもあがる……。

会社の終業時間は5時である。日本人とちがって中国人は今日中にやるべき仕事が残っていても時間が来れば残業はやりたがらない。ましてや日本のような「サービス残業」などありえない。もっともこの点は世界的に見ても日本が特殊な国であるようだが……。

中国人のよいところは親兄弟は当然であるが、友人とか世話になった人はとても大切にす。信頼できると思う人には損得抜きで物事に対処する。一般的に組織的なつながりは弱く人と人とのつながりはとても強い。会社のために粉骨砕身するなんて発想はほとんどの人は持っていないのではないだろうか。

大連日通の社員は90数名である。(コンテナやロールボックスの大量注文が続いた10年前には150～170名いた)私のいた2年間で社員の結婚式は4回あり、都度スーツにネクタイを着用し主賓として中国語で挨拶をした。勿論私が書いた日本語の文章を通訳に頼んで中国語に直したのを見ながら発音に注意してしゃべったのだが、皆日本人の総経理(社長)が中国語で挨拶をするのがめずらしいらしく静かに熱心に聞いてくれた。

結婚式は日本と中国では大いに違う。まず「スーツにネクタイを着用し」とわざわざ書いたのは、結婚する本人と主賓の私以外でスーツ姿の人は一人もいないからである。

特に男は普段着で出席する。最初に出席した時、この人たちは何故スーツ姿(礼服でないにしろ)で来ないのかと思ったが、2人目の人も3人目の人の結婚式も同じ様子なのである。料理は大きな丸いテーブル毎に山ほど出てくる。3分の1も食べられないのに残ったものはどうするのだろう。本当にもったいないと出席する都度思った。どうも面子の問題のようだ。式の途中で新郎新婦は腕を組みながらバスケットに入れた酒とタバコをもって各席をまわりはじめる。酒もタバコもやらない私にとってこの時間は少し苦痛である。

酒はぐっとながまんして少し飲むが、タバコも必ず火をつけてくれるので吸ったふりをしなければならぬ。いつの時代からこのような風習が出来あがって来たのであろうか。それとも大連だけのものなのか?一通りセレモニーが終わり料理もある程度食べると出席者は自由に会場を後にする。とにかく最初から最後まで日本の式とちがった。

結婚式に限らず日本と習慣の違うものは数多い。例えば花火大会は日本では夏の風物詩である。ところが中国は春節(旧正月)や国慶節(10月1日)の時や何かイベントをやるときに打ち上げる。春節のとき宿舎であったシャングリラホテルが用意したバスで出かけたが、バスから下りて10分もたたぬうちに寒くて花火見物どころではなくなる。何もこんな寒い時にやらなくてよいのにと思いつつすぐバスに乗り込んでホテルに戻った。

もう一つ春節の時の爆竹であるが、そばで見ると爆発するようにはじけ、そばにいとこわいくらいだ。ホテルの部屋にいても耳をつんざくような音が昼夜を問わず入ってくる。ある人に聞くと昔から悪魔よけだとの言い伝えがあると聞いていたが、この音を聞けば悪魔も退散するだろうと思った。